

20

JAPAN

10

Tama

mm

6

5

4

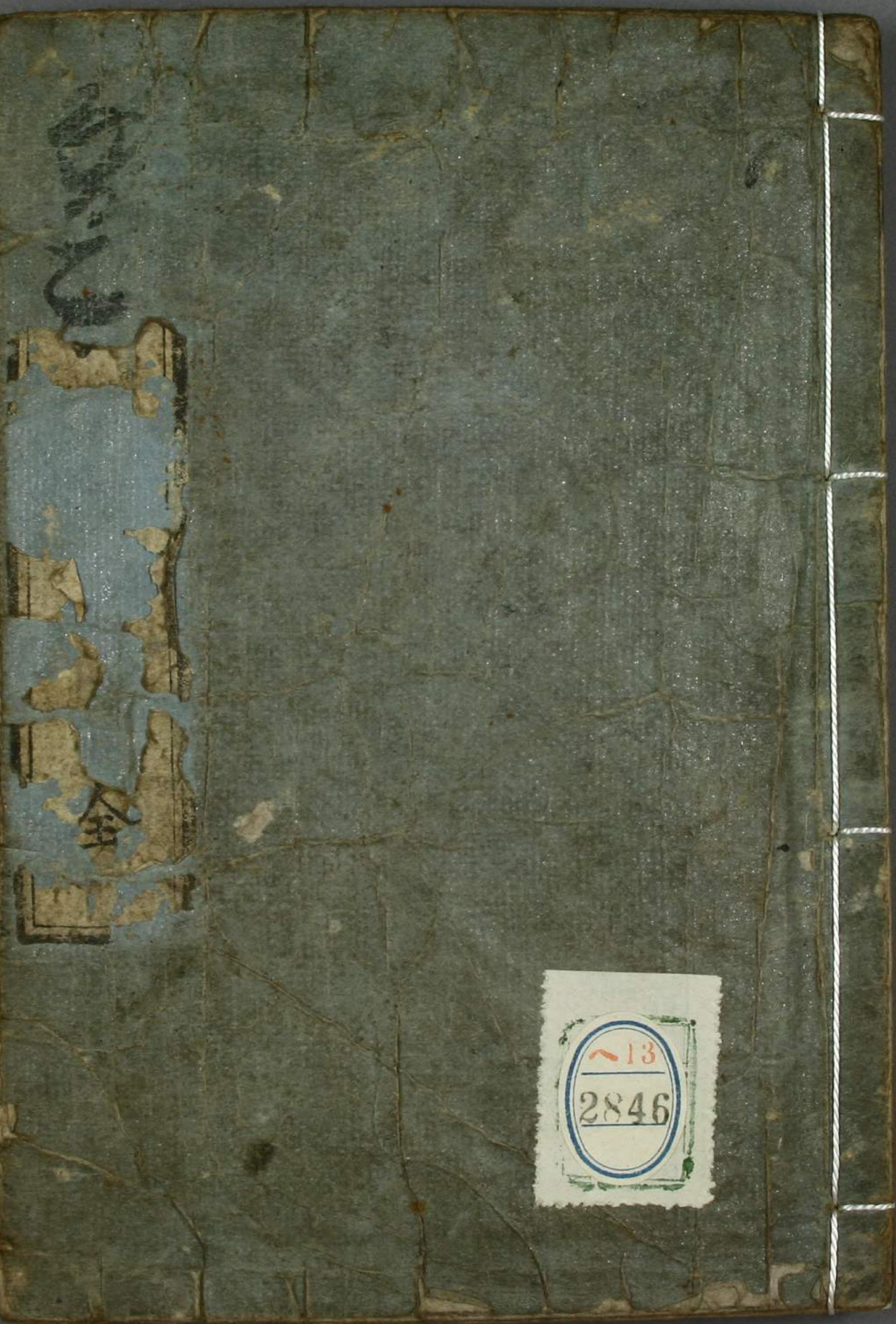
3

2

1

0

•



へ 13
2846

日 1984
23

13
2846

鳴子 凡序

紫媛

ハ法華經

乃く又源氏の文を

あらわし。余が反古のうちふ著を鳴子凡

とハ行ひどや。凡の夢よ。梨子ハ生び成

ざ作者の方便昌時。あれ種ハ接木の也。

宛辨の速風より。風車の如く。筆ハ馳

馬乃糞哉撒ふが如し。作者の妙に

笑むて可笑し。笑ひとれが素より本意と。

序昌代だみ其 塩ぐ辛くば獻作者流

を改宗して高野せ味噌すゑと云ふ

筆へゆき云ふ

丙寅青陽

振鷺亭主人題



鳴子角○例目○凡○錄

其味
奈味ハ

金口螺言西風空海場

山

其子部
是一卷

柳園說書

信天茶漆茶碗

山

凡例

いづか小倅めらん贋を後の事よりせまざと承ふうきふ
風車水車ふむる古モて偽口く巻子の娘模擬ふさ
すが激氣も伝ふ事り法の乃づて振くよ沐日和
の、天京あひ男三合まちく島口合ふ立ふあつり
湯人二入づまお合傘の乃づてはきみ娘ふ奈々れ親仁
毛字余りの三合丈句ふ南岳めは草花絵とひそて

おがむや

顯因庵參曲齋

賑

立

四谷馬士唄

社若喫とあわじや
熱でりふるるごそとくに中

渓川流行唄

ヨーロアミと茶薄志とをも
惜でりあかくさんご娘と
むせぶ中

坐

鳴子匂叟唄

ヨリグアミと茶薄志とをも
色でりふるるごそとくに中

立

山内自我謁

娘でこそひとひどより
寒ぶりうるう
五ヶ原中

一相

み案山

芋葉

合羽

桐油

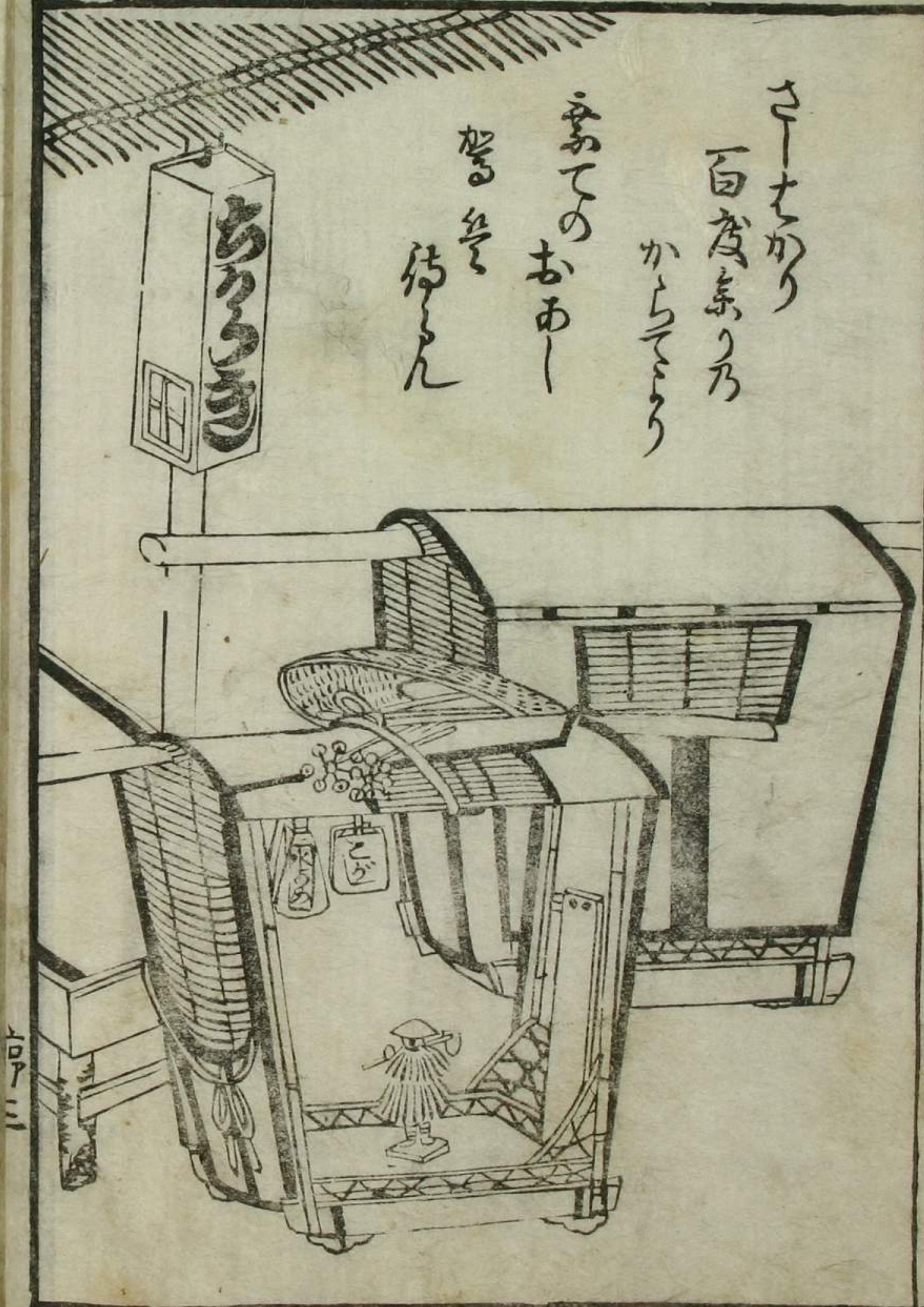
年

傳

鳴子丸

○四套續

爰ふ鎌倉鑿宋乃むりはるせまか雲の下町よ軒と
なじび裏儀家九尺の店みもぢやくしやどお姫う
一人娘一人親子喰ぞ食樂にそとすあつ娘懶を
十八人あ多きよくもみだ嬪致なうがまふうわひ
つきあつてさる田舎の大薦の方(妾奉公の口あしが其
日よりば娘儀み面辨懶えよ娘出来て腫あが里



二日とて又は三日とて、おまかせのうべに金乃はへどらを
おれぞるおまかせのよふおぬくあべぐわくとありく
えがおや一娘おぬくを死のこんあくのひ物
して山内のお祖師モトが御坐せんとて日下郷は
娘をおちまひ翁カミのびきみ集マツみ乃連ミチヨひとろ蓬コスリ
三人左よ名ナメ呼トモ譚名タクメと喝ヒム一個ヒトへあだた持ゲンド
一個ヒトへがんち候タクメ一個ヒトへとまく八五良ハシナリとひ三人
れす難ハラみをとす前生ザンキむれハラ諭ヒカル謗トモウ乃ノ們アガす

さもももくわめくとかざざけまざざくハサハサふぢづじくアラタお
おーうひをざくハサハサとゆうむるゆハサハサかの三人の者アレ左右
やうわつ連タカシマとてまきひつとゆうて處カミとカミもあ
た乃からタカシマペーベダハサハサかのの目アラタでみんアラタイヨの
がくハサハサ「コクおぬくさんねりの旅ハサハサばよんはる
ちの旅ハサハサとつう財カミの小旅ハサハサが長ハサハサくな
くわとおとふまよりハサハサ「うようちやつもお
き程ハサハサおとすもの用ハサハサが事ハサハサと申ハサハサぐ
な旅ハサハサあおめハサハサ乃アガとおげで不称

かくよがさとつむりあをうへ、鼻たるがあらもつてのとがにと
アハラルタヒの本ハシいヨア ヨシクトシクあくは事トシ、お姫ヒメくが
皇カミがわくともハクモおめハシ方カミ二ニ人の内ナカニ、ゆふへハシま
う事トシがなハシづめハシおまハシが姫ヒメれハシまハシうハシめハシうちハシの
算ハシみやびハシあねハシひハシかハシえんハシ、ゆしハシあハシのハシ内ナカニ
はハシざハシあハシくハシかハシのハシもんハシもハシあハシはハシ、ハシりハシ、ハシくハシ、ハシきハシ
あハシ乃ハシあハシはハシくハシわハシよハシ、ハシきハシ、ハシきハシ、ハシきハシ

おひき 桂
あくら 桂
のそりらくめのざく 雜みまことをのせよ
よ 三宗さんしやくがふきまみれまみれま羽比はいあらびひの魚せ魚
當とう経きへとのかそりうかさんかさんみわ切きだらうだらうきくも
おもものんのん算さんじくををざスス おづらあづらあちよととを
りとせとせ居ゐるる 芝しば農のう者しゃななおこすこす唐とうをを
和わ云いの經き本ほん書しょ内うちう事こと乃のきき種たねへへ おめめををぶう
こしら鶴つるのくせにに そりううつつ、おきんきんななぐぐううこしら



萬乃かをもむぢくわうすが往くもき
のねくふりゆまふりせみんとく
半へすかむに意へきだの意や
意ちどひ乃縁日でとかくいがん
うと生じあとトタマキのる繩どらう
かくんよとくんうせし跡より過去をほく
一足によみのねがなくすそくは確
をそぞろあまへぬれざるをあけと人よあび

あ、やうな
あたしも、まごとよんをくわす
きらめくもめうやうとんまきゆう「まく
んとう乃まのじで茶あづてとんご病へざ死ひ
こちとくきくまくはこすがつあく
記ふ経おとく日がつおもいあいみさんなおや方
むづつにぞうりくさとまちと京きをきさせてもく
きくもとが湯ゆをとめてくる内うち院いんをあもしり
ソシテ水みずもくんでおほコウのバさんおめのせうど

うながさぬ門口くき
すうつて疫病びやうよけの薦すす
てあきれあきらかんかんらちらる様さま
りて火ひ槍槍竹たけがさしげさしげんんどどももううせ
てあきれあきらかんかんらちらる様さま
よふりのむむあがあがててあきあきれれ、
ふまつまつよよマタマタははああいいだだものものううく
ううくととううくくだだるるくくせせりり火ひたたももソソ
ののゆゆききよよををああききかかくく見みると

うふさまうとくだだもよ正の「内田屋」^{いなだや}
凌せん^{あざわ}「ナカヤ」^{ナカヤ}と外^{サボ}結^{サボ}ハ二三日の間
さんざ「おもく方おもかがまんさんでおくちやかうまな」と
まひよ^{まひ}それやたヤノおもくせんとのぞん^ねと
ときの病^せと熱^せで見世の戸^とをあけまし^なまん
じとまゆて戸^とを^{あけ}まつりと五合^ご合^ごと乃
附れ物^{もの}をすみ^みりと^うそれやてりま
らまくらまくあくあくかけほ^のの^うまちまち^う内

まあらぬのむとむと重^かめうまいハハ^{せん}ア
ほへうとびよどん^ときたちとたのまれて
えんな先^えコウト^トは祖師^{そし}上^{じよう}もみき^み城^{しろ}へと
りの通^とみままでよいでやなにとひりてき
タマジ^{タマジ}（種^{タマジ}）とひりておひくア^カ角^{カツ}みかり
くの^{くの}とひりておひくア^カ角^{カツ}みかり
をうれ^{うれ}なはととてア^カ餐^ミをあらう^うかん
ぬは食^くべつらまくとがんたうツ^トよ^うそ^そとその

船食五文きるも、豆豆が便人えんじん「そんくまさんじう
てきしもと」えち株「ヨウトセウとむなリレミ」と「さや
まよひ長良ながら」どり「みを送ておまよとび
ぢりがんするかあね」トロト言とひの「アガ
ようせんかうごまくね」かはり玉ふき「アガ
ひうすへるかうの明宿あきどき」ゆき「ち
きゆ中」とうてたてて、ゆくへとゆ「朝湯屋のア
うすごえながくうぐくもと、もとがぬ
乃

内すもひて戸をやどみゆきう生と
とまくがあサタ取りまきてきたる女房
死て今世も生むと命を一命とみむ
れんをゆゑが遺するどりて様とひらき
るとすよウ店のれど物へどりて
くもきが又おきよきそつ事に
ゆきすへ一あらくあらわびとが解へどりあは
きゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

あがむかへりてちかくまづびのよじをす
とあそ幸ふとさわる事ひし所なめ波^{なみ}
をあそびてあはれ内^{うち}がうつてゐりてどた^{あはれ}
てあはれきとあはれき
めうくがほんのふらはしゆかくのうかのうのへた
せじなめてまく^ト戸^戸ざかまからじく出^でてやまともと^{あはれ}
たちまちひがひきうきあひまくさう
あきなづか^スるよか^セたつらにきくよそ^セまく
すち候^セりとんざつともうだり施主^{せしゆ}づらと^セるやうだりも
よきぬめるがつひじが一^{まき}のもと^のだり

トアキラムヒ明店のれ
ナキアリレギヨウの取がするをひうたじてヨウヤトキミ
クアキリトモヨウキアヘン店のうちくこも
ノルモ元でこそモロヒテ居る所く一ギ
アギタ

酒店の肉うど戸をやそめふあけて
なまごくいはるつらばうき一出一

今も
さぶら
がよみ

内がぞもんざまがわふくま
金を初でぞくはく

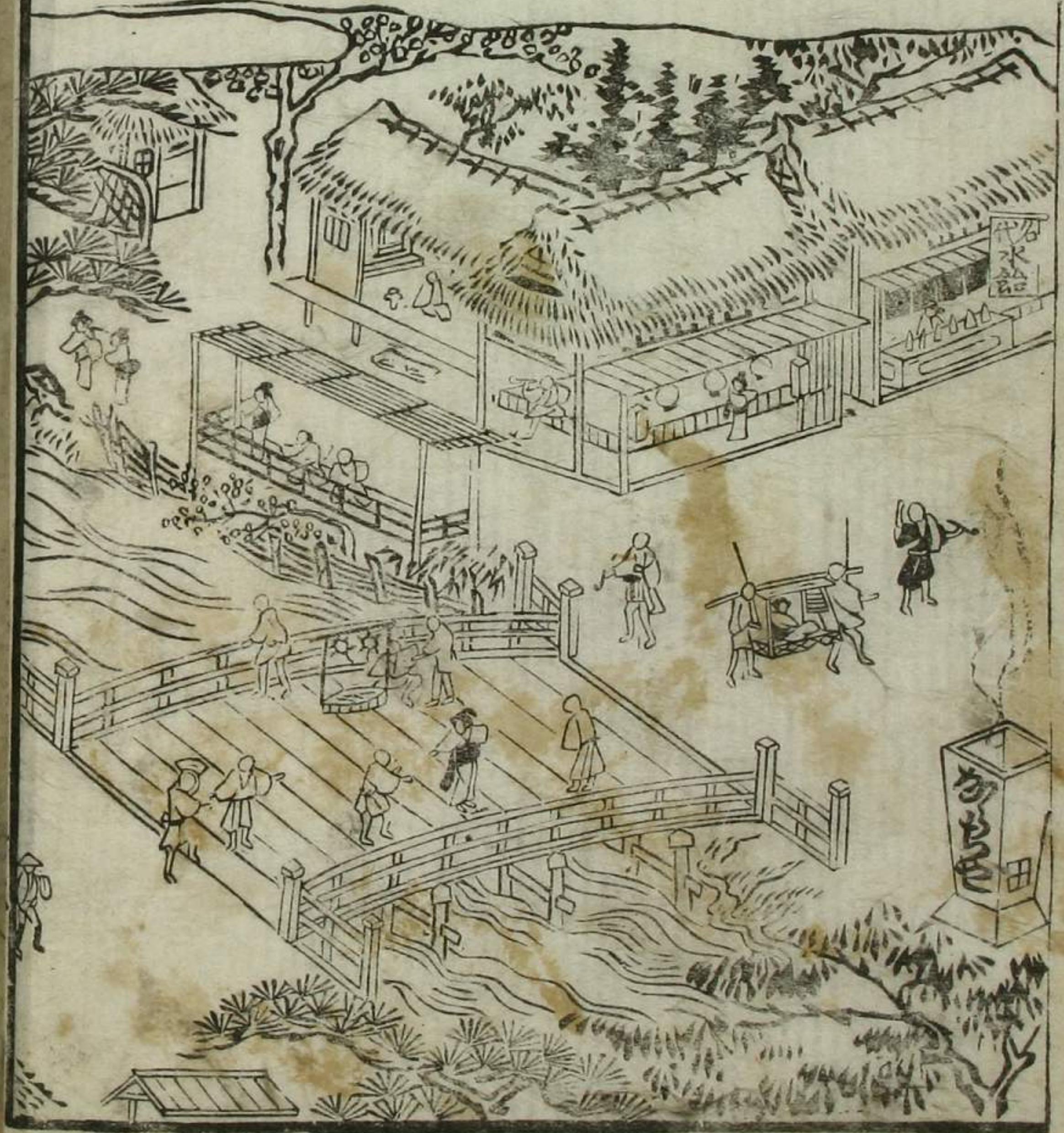
まことにかの又世を出せん
ある約束を守らる

がまくの事はあらへ
かくは長屋の前へ
きたきれり

どうかのかへ疲れぬひつむじて底くもとかどり

さあしてお出でにならぬと申すがつるぎ
コレはいざかうとゆふところのそれじがする二元
の事だよせむね新郎のまへりとくらへ
うがゆめに乃とくのうなみよこゝもわくも
あくたのも一外や一件へがくのまへりとくらへ
だくが屋へ見世です」
おほきと見ゆ一様で二
様でと醜をあんきんみゆへとれびゆソレ部の一件ぐ
らひあてひきよへとくらへ死のうんまへりとくら

仏乃のゆき戻がすとゆくのび「ふうじゆゆを破る一株
ヨウシの葉サトウ」
あく抜「そんなんむかへて
乃旅とてひて一株とてひゆるみがへりおう事でやまと
そのむゑ三寺へ奉方カタマかうすお出よへちよだよ
見せの帳カーテンをすおせねだんきさんよによくあ
アレタ仏イキが今小役おもてとつててシテあはれた
ぐるまなあくよ「
トウトウ内
をよとお一株サトウがうねサトウとくと商店の内シタをうかで
様シマを行こうと戸ドをひきまうがよう裏シタの方ドてひくら



馬月

いと

十三西北

花火色

繪葉

圖子八

さき矢をさむがいサア
いとくまくまく
しもくらうてんづくいきめうや
棹一天四海の帰め法乃正利益著して下
鑿昌ハ久を重みて彼ニテのひようをかく者へあゆく
舟の上にのりたる有ざるやうはまよひだめ先のと
はどふ濱のほとりよどり此下水車風車水船まよ
じの船物にて或へせぎ下の着板を櫛よ棹ひる茶
のき
が新葉室の底板よまきと一ハの花乃蓋然ひる東

道へま室系後羽集れをあ中に
おもく庚ぐそのなふヨあやかきとへまわしや
どき一^{んち缺}そくあそとまきをきのびくらわコ^{もあら}水路^{うり}が
かくふきへしきは曲物^{まがゆ}あるのう畫^よをういれ
もろてうろて水^{みず}^{あわ}とあそ^{あそ}て進^{すす}をまだまじてや
ううきあね^{あね}う^ああらへらうかくもあく^{あく}ま
くそまく^{まく}よコ^コうまごそまく^{まく}うとたくを
くそまく^{まく}よ^よあまく^{まく}おまほのあうん^{あうん}まく

うやまうてつづくおぬきさんおとくからうてんね
あくをかじいぐ愛て見よコウる番異及どんコサ波ぐそ
屋さん御ぐとやさん建立アキリアカ
なんとや薦すうその薦美を一切うそさんあせ
モノなんふと薦のろてアカチ血の乃乃薦にする
一そんごく進せますへい葉よるなまくらくひり
こそ乃禮のゆるれをあうとらてやく廻すべよト中でつ
さるまをえつ魚下アシマれるあくへたまをまもスニチツ
がんち水あるのまがおそりひを袋よぐりまぐら
是でおみやせがまごとまあのいきる様を角アカす
おぐうひよまにして続ぐりぬまくあもト誰アシマど肩アシマとえ
てぐざらアハハがうをねとぬりそんきよはねアハハ
がりをいわきせせううううううアハハさわに
ソリそとふ水車アシマ水車アシマ角アシマむすくアシマさん
なまつアシマとふきふをアシマいのへアシマとねアシマあら
まくまく食アシマコウだあさんに角アシマむすくねアシマ
は角アシマむすくねアシマあ、暗日小月又がまくやスアシマ

を一本、ざく鹽吸き、肴なり。ふと楊とひもにてまます
がつゝて、汝とのと自らねれかろ。不とび事、ざく
ヨイをあさんゆの肴あり。汝、ごをにせんをす。コレ
とんどハ海をよます。山よまとるを、いづれお精進ざく
らす。レコモリキよコク、をあさんとくのわもす。又、
おひたつともあ斗が、よううの毛、をあざる。みだかへ、お精
を、さくまを、さくで、ゆきを、さくつても、あこじし肴を、くわせ
ひあせ、牛皮、ごよぬ物、瓶の中、で、飼う。ひちやも、お

すとども
てる観蓋の玉子焼などあまきせけのうと啼て
早房のかとふがぬよ白うえをあまんあせ、ざま
ぐもぎも一びこひきつてのう何ともあんまりぬえん
また大車の蓋をとふと浦老^{スエバ}が伸をすくんで轡
で車^カがなまくの鼻をたぢれ^{ハラ}てかとひくを
みねつてお車^カづけ^スうそもあん^スち^セ
燒^{アキ}その上^{アシ}青^{アオ}ゆき^スかぎり^スゆゆまもつまゆ^ス氣^ス
まくまくゆゆもまくともまくの施^セ走^スおまく^ス

トちやどんと一月のじとあわとこあとつてちやどんをか
もきそとうけ刻むうことをまかむせと日を白くあさす風^{ふう}
うきやく^{あさぎ}一月^{とよ}く死ぬくまつ事よく^{とよ}とんみる
がづなゆのいわ^{あら}ねらへゆく事^{あら}がわるくわらぐ
まもとがゆふきうてゆが死^すりやなうたよ^すまんをま
とととゆが配^すふ化^すてととまのいのどあさんちあわら
ひと耳^{みみ}つとま^ま非^まやくせうもくは様^{よう}へゆきあれ
こくちゆうとくま^ま破^はぎよ^よくあがまん^{まん}がせうとん
がす^す一月^{とよ}とくま^まめい^{めい}まばとううがゆまちを

破を一株「ふんざ歌だと破を一株お玉（えだね）おもと目と
ととろてきたのうどまくすな」（まくすな）ほいふも
さん忌中（きちう）のれをそくらむにまれてのよあ店立（だてたて）
のあより「そらあそとアレ雨がどちらくお川
とちてきたよ」「いくせあ猛（とがく）とトロとほりとうとく
ねはあが立ち出で淀の橋をよそり鳴子の里（よど）
か重（あま）は人ハ雨奥（あまくわ）縫（う）とおそれびて雲也（くも）と案
を仰（あお）ぎてあぐ向く扇風（おうふう）とよて一段の

黒雲（くろくも）かるとよに「が匆匆（かちま）急（いそ）雨（あめ）さると隠匿（あひる）恰（あたま）も
ドや馬の濁小伎（とづまうべ）と娘（むすめ）のあもがてとくあしへばの者
う後（うご）とさきゆつとひひきやつとひとくぱうと徳
比稿（ひごう）の本乃意（ほんのい）がまよんで命（めい）ぐりくと息（いき）と
てあれ玉（あじき）「おぬくさんみかなかれへ生（うぶ）れりと
そもよあげね」「ソレナラね（ね）あがらのソレナラ
零（れい）う」とあ「ソレモ密（ひそ）がざぐらあ「いやよおど
しよさんねちをとるナノソシキテキヨリヒトおりやあ

「コウモリがうよをみてヤラセとゆく
あくちぢづ川よかゆめアヒナす事無く」
兩よりうき
づがのまとうぎよぎよかゆめアヒナトに人あんぐ
うよはうひのきのねうれさかく
ゆふ量せうひんあるとすけと
わくさん見ねテレくあと
うるがあらわゆめとアノサモん爲んざ
ああねうくくく
「くこあおも二人に」と一矢
向のせやんのゆふうきがこく
もぐんて雨とまのれが
あとう晴る整路のむきえイヨミタヒキアリ

トヌエアシテアタリトモニシヒツガタヒト引本
シがばせらもんのあそてるまくと小ねまみく「こわだり」の
せらもんの内「コウ」、けぞんぜの馬ご人の内「小べんがまう
う教と矣」
ゆうこまのあ「ナミ」
シがちく生まうめ「ヨイ」をめし事ちく生まうとくうよ
いぐさ「ヨリヤア 製糸^{ざせん}する事事あひたうね」小行法^{こうぎ}でと
らあ「そんならうるうるあんまつまんでかおま國^{くわく}
グ」
よあさんとうあ事^{こと}すび^{せき}とんあく^く藍^{あい}をつまうとん
くも人間の角^{くづ}くや^くおほんまと^とう^うびらうの「ナ」
おまえ

とれなんのそと^{そと}ごモ^{ごも}「^{まき}」^{まき}の事^{こと}く^くあ^あハサ^サき^きと^とざ
く^くも^もあ^あわ^わく^くら^らま^まく^くね^ね「^{ひと}」^{ひと}と^とれ^れあ^あれ^れハ^ハと^と
「^と」^と大^おべんの通^と、^とあ^あう^う「^と」^とう^うか^かく^くの「^と」^と居^ゐ
「^と」^と尾^おと^とも^もあ^あみ^みと^とあ^あ極^{きわ}、^{きわ}村^{むら}乃^の日^ひ清^{きよ}、^{きよ}也^や
つ^つび^び空^{そら}のあく^く時^{とき}材^{ざい}中^{なか}のま^ま室^{しつ}と^とき^きで^でる^る「^と」^とひ^ひと^と
ひ^ひと^とあ^あく^く「^と」^とま^ま尾^お「^と」^とリ^りヤア や^やい^い尾^お「^と」^とや^やと^と方^{ほう}
「^と」^と男^おめ^めも^もの「^と」^とざ^ざも^もと^とむ^むき^きる^ると^とん^んざ^ざい^いソ^ソ
ひ^ひう^うび^びう^うる^る信^{しん}と^とか^かを^をう^うい^いて^てざ^ざ一^一が^がん^んな^な賣^うま

すゞし「コウとん」舟をひく四百石す船の國へ橋が
きらあ魚をみすのび風えどもすとまきくや
酒み乃二千にえわやう「あらびざせりぬ破毛モモリヒ
北傘を買ひたるか二百のひくあへじび儀へ
くわくせき社内ひいりだの雨のゆる時ひくさぎら
ありハセツちゃんづめみみて那美をあら事ある
まもまもすゞし「アサト」の打で金を争ひて
小うそじかくみあるつて屋「アヤ」ぢづれせんとあらうと
おもつうまる「コリヤ」儀アサトはちよ「あらじさん儀アヤ藍
つにとく物よもづきと「くそぞぞう」あらじさん儀アヤ
まのぞきにやアシの藍づがく原と「くそぞぞう」あらじさん儀アヤ
きらく水波あらじさん儀アヤ「ト大聲をしきあらじさん儀



おもてのまへは儀とておもわうと「とむぐアヤシムが
おせきをだうがっておやまつらう」
ちかくたまうはまうがんやしれ「ちやうりがたかでまちう
おもねがくづきよめや籠つがく扇形「イヤ」されとも
あうたねだぞじくのとおせきあらマレ籠つがの中
いきくとほておらむ「せき」トたかまつまんでもアキラ
が田舎絹魚であるのがさりだう深きびとてぢき
らひがぞく色みへちと巻きがふる「ニセサウル」おの
が田舎絹魚であるのがさりだう深きびとてぢき
小籠とうまう事あ今さすの松葉茶お色よなると
りすをあらそとの盛食お白ひをかせそろう。そん乃
とひへ「てらまつらふひく」アリうちどりれてライセ
なぐそをかくばう「モんかくあやまれく」「御」もとけ
きくであつゆと「他」の事のとくうま籠の白うく
その白う口うませんまくやま籠の白うく
よく寝る事も安(ません)かうか「こな者」の
ことあらうと思石アガタヘ「くそ」おもづくめねみ
まくらまちううてやうくまくらまくらと「目」ふあらヤク
まくらまくえのねのまげふうきまくら

あんなせうぢんがすあるうさん「アラアちのむらうあぐ
達。あんやのつばびだ。色が松やあ色の屋みなうと
時へおらあそせ」あくでもひきみだぞだね葉色乃
屋かまうるやあらびてあく「アラア」あくあそとうんち
さんと雨どものくらんどてふるうて向の細乃の方へ
いづれくさべへかくあふきじまあれ」あくてきは
「今のは霏やく庭みおまが見てとふト向のまきな草モヘビ
こもをましがじのうてまぞあは」まほ「アラア」あくせき
ふきめけいとあるうかゆ大へと出でまよとまくハイも百姓え

ひうちあめ此か一のう五五「アラア」同敷うモアニシハ
が細さわ「アラア」大切乃葉山子をぬすみあひこぎあバ
爾奥あまぐよまみてが一の裏笠みのささをぬきみたス」とい
ありが出来ひまきあみのぬらひがのあらびハシく等す
みそあよつたある者てはひびやせんがひりびと内家
とのどもとうひととて生きてあらわせあらびびの波
をそのうせり正直者で親の病氣びやうせんじゆうせんじた日
ひ食でよ乃内れんをれんあよゆるだでござります府

うそじこひらでわざやしがくももひよをびや
きやとみの狼よ化されまつも伝心ありのあたぐ
やぶぞ冷ちあられ「今くひ食てひゆす
ゑち翁 さんどさ
あごぬ傀儡と「どん吉きみひじうんべい」
あきる鶴よ巣てせうすながりひじうにみげを
なひキと目がくわに「どく見つこうほこなひキ
行國のおとづく「せひまきよおとづくまちこ 今
なにう親の病氣までづぬむよからてひ食て死す

もんもふ碑てひがまゐわれたりコテ行の
おとづれコリヤアなんのうちもそくをじ
ハアナムのうちもそくをじ
がらかじりふくはくまどりてかんぢんび
あがめこくわくきゲモノにんじ年ま
とあさばかんまく
とひぐれんはくはくまく
わんがいもんせわちんで大きな因おもいました
よもとハア裡さき地ぢも化かすてあらじて行ゆもちやも魚さ
ぎしてゆうぬやイき翁きめゆ清きよ酒さけつまむ

鷺の鳥（さんび）よりとおとくに馬（アシ）をレ繩（セイ）ととてゆすそんじゆも
一（ヒ）バ（バ）森（モリ）までとあへニハ（ハ）不遠（ハリモチ）のおゆでとみハ（ハ）おれの事
一（ヒ）追（スル）ト（ト）あきの水（ミズ）あせ出（アセムツ）と百姓（ヒヤシキ）あひゆす（アヒユス）百性（ヒヤシキ）
つらうまざ化（カジカ）れてあひくると（ト）おん（オニ）くわむちとんち
きちト（キチト）おさゞや（オサヅヤ）や（ヤ）あひゆせむらをりふぞうか
ね（ネ）のう失（ウツル）をうそりがん（ガン）もあくらひをまかよひけく（ハシマキ）
ふううて松（マツ）の木（キ）の（トドメ）と（ト）く（ク）も（モ）ざくら（アガハ）又（アタマ）うんこ（ウンコ）
ゆ（ユ）とあげてうる
まんどうとんみ色（カラ）「（シテ）」（シテ）とがうるとうとらね（ラネ）う
そ成（シテ）やうま（マ）すかあやあがうて「（シテ）」（シテ）とあひ寝（ヌク）前乃（マキナカ）

百姓（ヒヤシキ）之（シテ）「（シテ）」（シテ）とあひ寝（ヌク）前乃（マキナカ）
ね（ネ）せふん（フン）ま（マ）れ（レ）いと（ト）を残（リ）す（ス）とあひ寝（ヌク）
が（ガ）細（スル）蘿（モ）と（ト）く（ク）と（ト）の草（シ）鳥（トリ）の草（シ）鳥（トリ）と草（シ）
家（ヤマ）と五（ゴ）と（ト）も（モ）あひて（アヒテ）かく（カク）と蘿（モ）と細（スル）蘿（モ）と**合抱**（ハグボウ）と
ら（ラ）と（ト）かぢて（カヂテ）よ（ヨ）シレな（シラ）と（ト）ん（ン）ざ（ザ）く（ク）り（リ）く（ク）
（シテ）と（ト）うだ（トウダ）「（シテ）」（シテ）池（シ）のう（ウ）と（ト）く（ク）「（シテ）」（シテ）ひ（ヒ）乃（ノ）
合抱（ハグボウ）と（ト）く（ク）あがき（アガキ）細（スル）蘿（モ）と蘿（モ）と見（ミ）し雨（ウ）を
ちくわリ（チクワリ）水玉（ミズタマ）と（ト）うるう（ウルウ）と（ト）せん（セン）じ（ジ）みす（ミス）ても

お人ひとてん人伴のとこにぬちゑだ「おそろかんまんま
でのありひようをへつらをあうミ安」
首の瓜が草ごくとあかゆあかゆとあくまん見ててんを
あらうなリヤと大きな草虫いのむしふくらつてれるよ「バあ
といあう草のをみうてれる草虫いのむしをすり
あすりまじ小草の葉の合羽あわぎへせよる ふもさんあすり
れ講中こうちゆうよからく「づくぬき講中こうちゆう
晴間はと寝下彦あまこひこふ雨傘あめささの骨ほお玉損だる三人までえ
の難あぬるは乃雨あぬき嵐あらわたちのねり共わ

丁とと皆みなとさくらるるやみ雲くもぢと雨あめやと震ふるを
サさくやんでききままいお堂どうぞう事ことはけよ「クルセ
するままとあとうぶとあくのくのくうトはくねのあく
とふぬるよ「アットアツすゞらも龜かめわねわねぎう齧くの
駒根こねりきうとよ守まもづづ」「サさくああざざすよくい
りともよどよどう「ワタわたた、ああざざうう、そんごんそんごんざざくとも見みとひう
とくらあるある事ことでわく内うちで外そとの雨あめ外そとで水みずのあり
ややせがねねつう「リヤヌヌすゞスゞビビああ町まちの地ぢびびく

あくべどりてあるがどらへナゼ赤出をろうとの「あ
つもぞううきとのへな」（内をくま時）あると
のをどうぞあくへひらうきんの小倅余かんありへざあうさん
きくひやへたのまことうの肉（ロウ）としらてふとこみとふにぎ
まつをふうてがく（スル）からん（アラシ）
あく三人のうちこそ、「うせだらく（アラシ）」
あきどらあ「ひとじゆまい」（タカヒ）
ざあさんいとじゆ（タカヒ）「ひとじゆ十丈（タカヒ）」
ちやあソレちらなよ「ざおゆの死ん」財ねぎりま
ぎりて卑（タカヒ）桶（カハ）をかりすよけりてぬをくじて男（タカヒ）

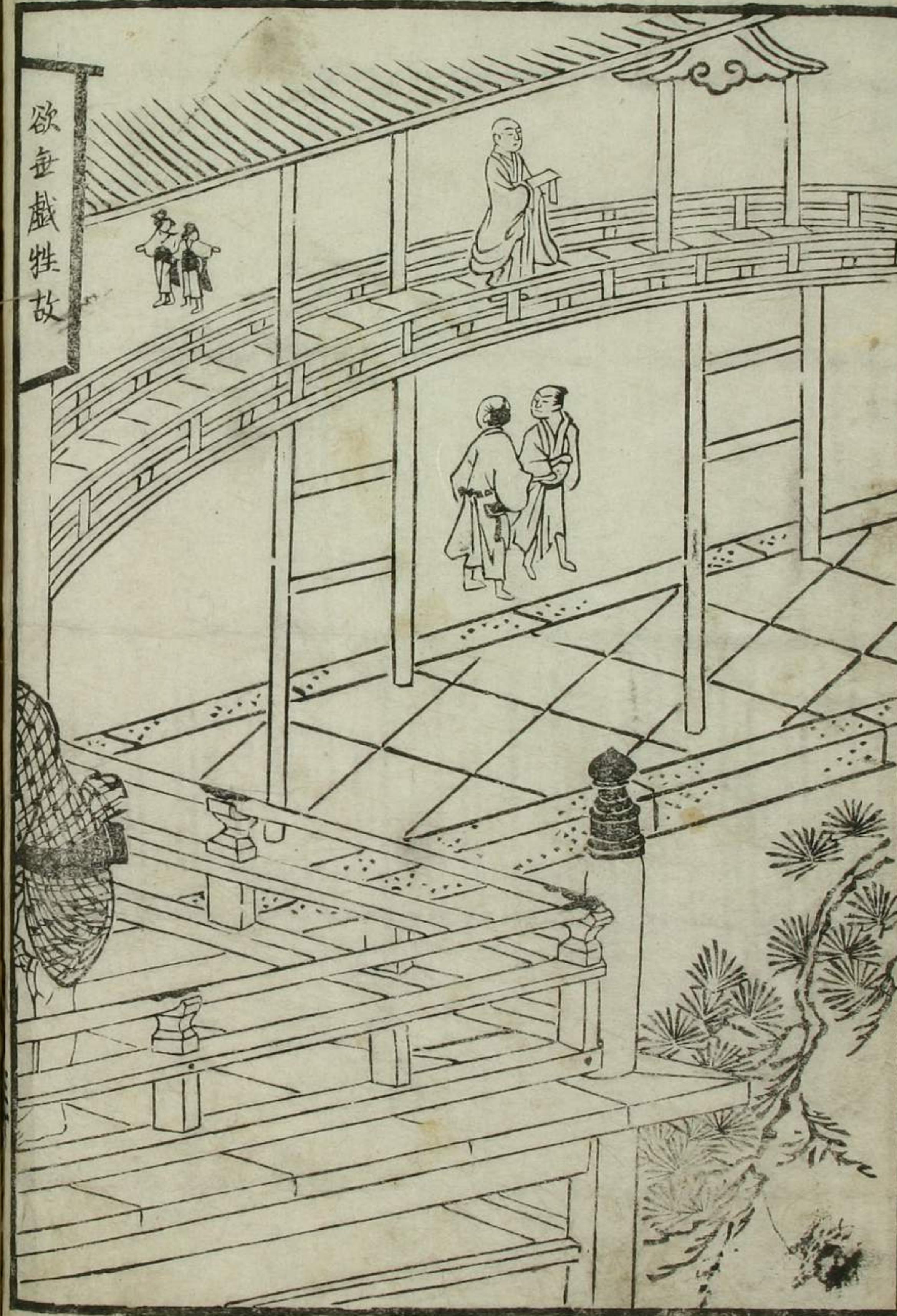
なんとあさんいヒュ（ヒュ）を安バありざくらう「とくさわ
大口ひあぬくさん耳（マツリ）をあざすとゆねく今のごく
ハア（ア）どあさん（ムギ）が麦（アシ）ナ（ナ）び（ビ）を東（ヒテ）ての山（ヤマ）のまご（モコ）ホニ方
ぎき（シカ）を三回（スリカウ）のまご（モコ）雷（スルカ）小（コトコト）癪（モコモコ）があくよ
る「あさん茶（チャ）とナ（ナ）に五へい（ナヘイ）アレス（アレス）小（コトコト）豆（モコモコ）
ときれよ「ナ（ナ）アニあめあをうすあじ」とおくのと
むださうする正（マサニ）六十年（ロクシキニ）のまよ（モコモコ）殊（シカ）かくさとあ
ビ大きあきるどとあうふうりて門口（モンブ）を多く「なむめうやう
さんまきうりく（モコモコ）乗（モコモコ）おちのさん掛（モコモコ）る

よすぎんのちとともうけなまほ
まくへどきにや
まくさんも年よりざくあらびさんふちもよひね
豆腐トウフはおとせだねトセダネ
園イチジクがえりゆきをうぬごき引アヒタシテ
ちやあそのせうぬの限リミトでどぎりドギリまとマト雨具ウエブす
まつて難ハラカニじますがぞお堂ドウまでその傘スル
あそく下アソクシタれせアリをうぬ夏ハまきを下アシの
泉スバヤさとへそあひびアヒビせセどいぎまのゆユまろ
うちかぎのべいからトシムアガカラヅキとぐちがトシムアガカラヅキコトカラトシムアガカラヅキ小ごゑコトカラが

かちあへざらととんなふをつことぞうきしもあさき
すまへおひがはうそ「アレくづけあつ色じあやどを相合拳あやど
あくまつまへゆきそ「あまくは
れりひをまさらあ「むりつぐまく鳥むとをつまよ「モリ
おき方かたまじれ代を十五文ごじゆうもんおろまよまよ「ライ
きまよめもくもくととく十五文ごじゆうもんまよまよ「ライ
まよまよ「わんぢ
わんぢ出できせ「引ひだハ宿元しゆげんまきらば「とく
とくとくまづくらハねね(もあ)あくまくと車くるまもね
あくまんまくとくびたがおうんま通とおぎゆく追おいにね

そんぞうのよつまかどおざへを従でうるあ「おれ方
ア志トモうざえんぢあういひあらわも人づのよま
行よアヒレアは賣りあひよきねト色こまき三茶
也くわんがふが出来たまきハラドありくコレく小今
やドがサハグの髪とあちがどてぬ胸付袋をあひて
ソロチ家とうて十五丈と一尺とくらむまういじ
ト足せらうあるがちまうがちと舞てんが
出せうが二三丁ゆけへんほひもそア、おまう下向の
ざれぬまおあらんの事あ是乃かみとませぬ

かどるゝ者やナ、おも元だうておまうります」ヨ
「えがうお見せたと申てくまね、えんがう
えんかなえんかな出でえで、えんの身みよ被はへり、え連
が二入ふり十五文じゅうごもんのふてふてあが、皮はの肉にくばらけばらけをも
今十五文じゅうごもんあるちやあせつにせつうせつう、
ぬが三人さんじんが三さんとゆくゆくね、ゆく物ものはひぬ物もの、ものよ
白しらまで八合はいかある相場さうばう、さうたすくても百ひゃくの金きん
が構物こうぶつ十五文じゅうごもんと買いて、いあがむ、あがむ



三八五文の金子より出でたとき
「おまつをながどよくの御事と云ふ
まつからず「やどはせ」もいふ事
五文よ貫也「き」の事
「らんの事」が「もん」が「もん」
その物が五文ほど「もん」
ト私志より實もあてもある小物を
十五文かぞてあるよきあること「まづ」
まづへ
大出事ソレ十五文「こ」の事
「大出事ソレ十五文」の事

トでのがうをうなびてたるべからぬれどヨレユイか
みさうはとくらむだせうせうめうが
せまゆるやんがうせりとらひやあいざうかふく
えんかうき者のえんかう一五丁町や二丁町乃中茶室
の門を出でて細のまつばのまつばのまつばの
まつばやうりあるもの中あどとれ坂ぬきのみ
のむあらねがやううもあああ子子うぎ
そんがうをけぬてあるきあらうう寫ほじ二かんの
筆者とてあさみとくわのれ(曾)ぎ小袖で手

ぬけ裏とひらねをすみのびく「あきらめやどり
て二人が坐と笑う「あうなうあ之事物とひよどり
あうだいするとどちらが宿しもとね」「そんう
賃とよせ」賃をもあひやあひ賃をもううのゆ
へ出され「コウト様ふ女房の小指がとれて本あるうち
とのる貨をもあはとつする内にまつて女房が
けられてるとたやがある「十五文よ利息とまきてあは
れんが」「もあわん人の人间の指く「ひめてる指よさう女房

の指ざとじう守ふ車をうつゆ「あらうとん
がうざう指とあがほんざてもね」賃にれやまま「考
てするかうがまほね「う女房の指まて娘ちもうと
とがねまゆ」とあがまくわゆ「ト素とあくめとくう
のまげねへとんが」指あがまくわゆ「おとせとくう
が指がの指とふれねがある「あらめたのまけ指と
をまくわせ「あらむ合へ「あら合へ」とあこからぬあ
いきりと「は指をわらひてはせ「あらわい、

みうづがこんげじお福とお娘う切ておらひのよまへよ
うがよ物来ておふくをすびてあるのゆす切てれど
物ど「ふききくしてり」お福うをお指とおゆくとく
うそと「うそとアのヒトヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
「おももあれ、小指をきみてゆくたタノお福うと
「うそとアのヒトサテでさる月とく」とお福うと
ちが小指どリ右のひだりう「あらやせと金ともい
ざおおりヨリシテナニ金らがうちおりのもの

おぬくが指をかき一奉りてひらあかられと小指ど
「おちあい」小指二奉りあひのう「ゆきだ美妻大妻
あく出せくサア指市ざう大きさりび「あきよひづ
あ金びコレでく先生おまがへに縁の自利をとのむく
とやあこちがせよ坐て臺てゆく仲間のしきだを
れが死指「ナニ死指「バヤトあれ」サレ窟みの指
が三奉りあひのう「おらあまがちうくみ」さる
いど氣づて又金べ女の指とあぬと今まへ指

ありあさんおまかれてから福(コレ)おらの理(こと)
船(ふね)をくまう「イヤバヤあめ希(き)代(だい)希(き)有(あ)め
むちや、ちややみらんちやうんざすとあまろてきた
」コウおり方(かた)ハ指(ゆび)と二車(にせん)かういてのとえあ小(こ)便(べん)りで
肩(かた)をつけておかる車(くるま)へね(け)れをうてさかと
そのお福(ふく)さんとやうがコロ(ちら)ふね(ね)をひるふれちやと薬
みすの車(くるま)がみて 小(こ)指(ゆび)が二車(にせん)へ角(くづ)かて仲(なか)るの
内(うち)小(あわ)薬(くわくわ)指(ゆび)あるまくらとくらのう(くら)あらちふ

指(ゆび)のね(ね)がまくらう(う)ぬ(ぬ)のよ(よ)あ(あ)ち(ち)があ(あ)ふ(ふ)ゆ(ゆ)つ(つ)くま
か(か)う(う)る(る)小(こ)指(ゆび)を二(に)車(せん)か(か)く(く)が(が)う(う)の死(し)指(ゆび)と二(に)車(せん)じ(じ)
三(み)車(せん)で六(ろく)百(ひゃく)の切(き)賣(うり)はしてや(や)ひ(ひ)のう(う)の車(くるま)へね(け)もの
お(お)ぬ(ぬ)く(く)ん(ん)ふ(ふ)お(お)め(め)方(かた)二(に)人(じん)あ(あ)そ(そ)ど(ど)と(と)つ(つ)の(の)び(び)レ
そ(そ)う(う)ら(ら)じ(じ)を(を)小(こ)入(い)き(き)る車(くるま)へね(け)る(る)の(の)指(ゆび)
ひ(ひ)や(や)う(う)て(て)表(ひら)て(て)あ(あ)せ(せ)く(く)ら(ら)へ(へ)表(ひら)べ(べ)き(き)く(く)い(い)ど(ど)お(お)
ゲ(げ)り(り)も(も)あ(あ)ら(ら)ね(ね)ま(ま)じ(じ)も(も)と(と)く(く)ち(ち)の(の)生(いき)指(ゆび)お(お)と
お(お)死(し)指(ゆび)を(を)よ(よ)ぎ(ぎ)を(を)く(く)ま(ま)く(く)金(きん)あ(あ)く(く)ひ(ひ)く(く)

あんともなうきうとおお橋さんさんが体の筋すじをきえあらそひ
立たつださうのむゆゆさうと相合傘あいわんででちかくと
寝ねととバアレアレく、向むかうテススうう正まををアヌヌトトはトトは
ふううててヌヌががももぐ二面ふたおのかかあらうおうおどくどくえののれれととうのう
サ五ごのややさ男おととききああいいややさ男おののれれととううぎぎのの事こと
あされあれれててモもキキヤヤんんががううどどんんととふふうナナギギええををせんせんのの最さい
指さくくのの次つかかててんんががううギギくく宣せん酒しゅののととくくううりりををも
駕かががちちまますすここ小こ内うちがが肉にくくくののととてて白しらささお
ぬぬくくちちかかんんああるる事ことのの驚おどろききでで田た倉くらのの豆まめややまととみ

白髮蠶をれ、赤が筋の附の縁とひ者とぞする職
乃縫うひ材とあくどり食がとうは、お笑を、自ら知
はた以後か心安むおとせのち。不株番一袋あはほふ
下り伏び、移へ京物どおもて、明らか車へ二人
あまあきらめん、ア鼻をそとせり。ア鼻をそとせり。
ア鼻をそとせり。
乃女小づきあひが、おとへ貞女兩帰よまみすゞ。おとす
テ、
内化分序自さんかくそなんゆもや廻せぬ。ト吉元

おとせりよまくおまの方のおせ仕小めでねなぐ今さら
かうどりまぬ事と嘗てよく持切出でそんをせりす至
より年あこおぬくらふちとくが風をさせとまなびら
くの大きなふらく、毒く、波にすと是あらの所方便と
がんふして、くわきとけ、洋で、口と泣もととて三人
一度ふ聲を切てなあ医悟もひらくる妙法蓮華今
ぞ直の信心小賽ぞ育がとき

鳴子丸大尾

振鷺亭主人著
おさかわ だ ち

内太刀

中本二冊

追刻上梓

此篇ハ右の鳴子瓦に、あるうの
三人乃をもひそくその盆山小
大山へかけまつて安近ふとあり
まとうらのまか夜をよりさらるの
おじうき紀行なり

東都江戸橋四日市

書舗 群書堂 佐助 挤行

江戸橋

